コメニウスにおけるキリスト教教育

－「キリスト教保育指針」との関連において－

尾 上 明 子

はじめに

キリスト教保育の源流を遡るとそれは、いうまでもなく聖書に行き着くのであるが、私達が教育（保育）を論じ、また、キリスト教を基盤とする教育を探求しようとするとき、近代教育史の先駆的役割を担ったコメニウスを忘れることができない。コメニウスは、近代欧米の教育において、十九世紀末に至るまでヨーロッパ（後にアメリカ）の教育・思想家に多大の影響を与え、そこにおける具体的教育改革の指針を示した。コメニウスは、当時の教授法やそれまでの教育論を見直し体系化すると同時に独自の理論を築きあげた。その教授法は、彼の代表的な著「大教授学」や世界最初の教育的絵本として知られる「世界図絵」、幼児期の教育書「母親学校指針」などにより有名であるが、彼の生涯から導きだされる思想や人間観は、プロテスタント派の牧師としての人類愛から生み出されたものであった。戦争に翻弄された生涯であったが、それ故、祖国の独立と平和を希求し、追放された人々への愛、貧しい人々への愛、その中でも特に子どもや青年たちへの愛と責任を感じ、真の人類の救いとは何かを教育のなかに見いだそうとしたのであった。

本論は、コメニウスの教育思想から、教育（保育）の底流となっているキリスト教による教育を、今日の「キリスト教保育指針」（以下「指針」）との関連において、考察していきたい。

Ⅰ　コメニウスにおけるキリスト教の背景

コメニウス（Johann Amos Comenius, Jan Amos Komensky, 1592-1670）は、現在のチェコスロバキアの一地方、モラビィアに生まれ、ルターにおける宗教改革の後、一大宗教運動の流れを起こしたフスによるプロテスタントの一派ボヘミア同胞教団に所属する

両親のもとに育つ。しかし、十歳で父、その後、相次いで母と二人の姉を亡す。孤児となったコメニウスを親戚が引き取り、初等教育を終えるが、十六歳の時ラテン語学校に入学し、そこで非凡な才能を認められ同胞教団の資金を受け、プロテスタント派のヘルボルン大学に修学する。この大学での学びは、その後の彼の思想形成にとって極めて重要な意味を持ったと思われる。更に、ハイデルベルグ大学で一年学び帰郷しラテン語学校の教師となり、1616 年にはボヘミア同胞教団の牧師に任命される。1618 年、フルネックに移り、そこで結婚するがこの年、数百年続いていたハプスブルグ家の植民地的支配に対して、全ボヘミア、モラヴィアで民族解放の叫びがあがり、プロテスタントを弾圧するカトリック教権に対する抵抗運動となり、いわゆる三十年戦争にまで発展する。これは、多くの民衆を巻き込んだだけでなく、ボヘミア同胞教団にとっても暗黒の時代の幕開けであり、コメニウスは、戦火により妻子を失うこととなる。更に、宗教的迫害から多くの同胞と共に隠遁生活を余儀なくされ、彼に同情する貴族の庇護を受け、惨めな生活を送らなければならなかった。その後、ハプスブルグ家の弾圧はますます強くなり、プロテスタントに対して国外追放命令が発せられ、コメニウスは、ポーランドのリッサに亡命した。ここが彼の第二の故郷と成るのであるが、この時期、彼の教育学の研究が本格的になり、多くの著作が現された。まず、各国語に翻訳された「語学入門」、代表作である「大教授学」である。それらは、知識や思想が混乱し、基本的な知識体系が整っていなかった当時の学問を体系的に整えていくことが一つの目的であった。この後、「自然哲学網要」「語学入門手引」（上級の教科書）の編纂がはじまり、後に「事物の門」として完成する。1641 年には、イギリス議会の招聘を受けるが、政情不安のため翌年は、スウェーデンに赴き、学校改革のため力を注ぐこととなる。

1648 年、リッサに戻りこの年、三十年戦争が終決する。しかし、依然としてボヘミアは、ハプスブルグ家の支配のなか、屈辱的な状態に置かれていたのである。翌年、コメニウスは、ハンガリーからの要請で「大教授学」で構想した学校を開設した。ここで、世界最初の絵入り教科書として知られる「世界図絵」や「遊戯学校」を著した。四年の後、再びリッサに戻るが、そこはまたもやスウェーデン軍に占領され、ポーランド軍との戦火により、彼は大半の蔵書や草稿を失う。更にボヘミア同胞教団は、この戦乱によりついに分散させられ、コメニウスも、オランダのアムステルダムに避難し、祖国復帰を願いながらアムステルダムで永眠する。

コメニウスの教育観は、彼の生涯と時代背景を色濃く映していることは言うまでもないが、特に戦争に翻弄された生涯は、人間観や世界観を既定することになったに違いない。彼は、戦火により、両親及び妻子を失った。繰り返すおろかしい戦争により、自分自身が辛酸を味い、多くの罪なき人びとの惨状をみてきた。それ故、教育の究極の目的が現世の

外にあるとする教育観が、現実への絶望から生まれてきたことは確かであるが彼はそこにとどまらず、神の似姿である人間に対する信頼を教育の中に見いだそうとした。似姿という言葉の中に「神の働きが休みなく流れこんで」「神が一つ一つの被造物の中に定めておいた目的を」（5章－2、以下引用の後の章は「大教授学」の章に基づく）実現していくことを考えた。だから、「人間は確かに放っておいても人の姿になることはなりますが（どんな畜生でもそれ相当の形になるのと同じことです）、しかし、予め知恵・徳行・敬神の心の若枝を接木しておかなくては、理性をそなえ・知恵を持ち・徳に溢れる・敬虔な動物に育つことはできない」（7章－1）というのである。そして、「人間形成は、人生の最初の時期に行なわれるのが最も適切であり、また、この時期を失しては行なわれないこと」（7章）「神が人間に青少年期を与えたのは、人間をまさに人間性に向かって形成するためであった」（7章－6）という。

Ⅱ　人間観（子ども観）について

コメニウスは、「大教授学」第一章のテーマとして、「人間は、被造物のうち最高の最も完璧な最も卓越したものであること」とし、まず人間の崇高性を高く歌いあげている。コメニウスにとって、人間を教育するということは子どもを教育するであり、子どもを教育ことしか人類の破滅を救う道はないとまで言い切る。

その理由は、キリストの言葉、「幼な子のわれのもとにくるのを許せ。これをとどめてはならぬ。なぜなら、天の王国はこのような者であるから。（マルコ 10：14）」から、「ただ子どもたちだけが神の王国にふさわしいと。いや　ただ子どもたちだけがその王国の相続人であるのだ、と。」（献呈状 16）によるものである。

神が子どもをどのような存在として見做しているかを提示し、「子どもこそが本当の改革のまとであるばかりでなく、また、その手本でもある。」（前掲に同じ）と訴えるのである。おとなが自分たちだけが人間であって子どもを猿と見做したり、自分たちだけが賢く子どもを馬鹿で口がきけない存在と考えていることは、実はおとなのおろかさの証明であり、おとなこそ子どもを手本とし、教師とし、学ばなければならないと言っている。更に、なぜこうまでして子どもを重んずるのかという理由について「子どもの魂はおとなよりわだかまりがないものであり、神があわれみの心から人間の現状に涙して施してくれる治療を受けやすい」（献呈状 17）とし、アダムの堕落による破滅、すなわち罪をもった人間がキリスト（第二のアダム）という生命につながる接木として、子どもが不信仰に陥らないかぎり、王国を相続するにふさわしい存在であることを強調する。そして、おとなにたいしては「ゆがんだ教育によって身につけた悪、俗世の・ゆがんだ先例によって学んだ悪を

振り落として単純と柔和と謙虚と純潔と従順などの子どもの頃にかえれ」(献呈状 18) と言う。以上のように、コメニウスにおいては子どもを単純に白紙説や性善説で括ってしまうのではなく、子どもの特性としての善なるところを教育によって更に高めていき真の人間形成へと導こうとするものである。

さて、「キリスト教保育指針」においては、次の二つの視点からイエスの子ども理解を提示している。それは、a) イエスの子どもへの眼差しと振る舞いであり、もう一つは、b) おとなと共に生きる子どもという視点である。a) においては、聖書におけるイエスの子どもへの関わり (マルコ 9 : 33〜37、10 : 13〜16 及び平行記事) から、イエスの周りに集まる子どもたちを受け入れ祝福されたことから、子どもをその社会的、信仰的未熟さのゆえに、ひとりの人格としてみることをしなかった当時の一般的な習慣や理解とは異なり、子どもの存在それ自体に向けられているということである。b) においては、「幼な子のようになること」(マタイ 18 : 3) あるいは、「幼な子のように神の国を受け入れること」(マルコ 10 : 15、ルカ 18 : 17) を求めておられるイエスが、子どもをおとなに神の国への態度を示す模範としての役割を担う存在として見ている点にポイントを置く。

次にコメニウスにおける人間観にたち戻ってみよう。第一章のテーマは、すでに記した通りであるが、ここにおいてコメニウスは、人々に向かって「おお人間よ、われを知れなんじを知れ」(1 章－1) と呼び掛ける。いうまでもなく、われとなんじの関係は、創造主と被創造者との関係であり、神とその神の作品、神の似姿としての人間である。人間を他の被造物と一線を画し、神が他の被造物には別々に授けたもの、本質・生命・感覚・理性を人間にだけはすべて結び合わせて与えたとし、わが創造の業の・最も完璧な頂点であり、被造物の間にいる・神の代理人であるとするのである。神の代理人として人間を造った理由としては、①理性をそなえた被造者　②被造者の支配者である被造者　③自分の創造主の似姿 (4 章－2) であり、よろこびである被造者をあげ、理性をそなえたとは、世界のあらゆるものを知り、その名前をあげることができ理解することができるということ。あらゆる事物の根拠を知ってこそはじめて、理性をそなえた生物の肩書きを守ることができるというのである。被造者の支配者であるとは、あらゆるものをその本来の目的に向けることによって、自分の便宜物に変えて利用することであり、被造者の間でいつも王者としてふるまうこと、いいかえれば重々しく気高くふるまうこととし、どこで、いつ、どのように、どこまで利用すればよいのかをわきまえているということなのだという。最後の神の似姿であることは、神の完全さをいきいきと形に現すということであるとする。

コメニウスにおいては、このように造られたはずの人間が神から離れずに初めの姿に帰ることこそ教育の目的であるというのである。また、歴史を顧みて人間が神にに対して幾度となく背いてきたにもかかわらず、神は見捨てず、あわれみと慰めの目で回復の道をそ

なえていてくださる。すなわち、キリストがその道であり、神の像に従ってつくりかえられるべき者の原型であるとする。言い換えるならば、「似姿は、寸分違わぬものならばかならずその原型の特徴を写しています。」（5章－4）とし、その特性は、全知であるという。全知とは、人間の精神の無限性をさし、飽きることのない受容能力を持つ存在であるとする。また、哲人たちの例を出し、彼らが人間を小宇宙と呼んだということは、「人間が大宇宙があまねく拡げてみせるものをことごとくうちに秘めている宇宙の集約」（5章－5）ということであると。このようにコメニウスは、似姿という言葉のなかに人間の精神の無限の広がりを見いだし、そこにこそ教育の可能性を置くのである。

さて、「指針」によると、聖書の人間理解と教育として、「旧約聖書の創世記によれば、神は自分のかたちに人を創造され、神の創造されたこの世界を治めることを人間に託された。しかし、旧約聖書は、神によって創造された人間が神より離れ、神を忘れ、自分自身を絶対化して生きた状況をイスラエルの民の具体的な歴史を通して示している。また、それと共に旧約聖書は、その罪の現実のなかで救いを求めて生きていこうとする人間の姿を記している」とあり、キリスト教保育の定義として、子どもは、「神によって創造された存在」として、神の恵みのもとで育てられなければならないとしている。更に言えば、神によって創造されたということは、「神によっていのちを与えられ、生かされているひとりの人間として子どもを受けとめ」る、としている。

このように「指針」においては、旧約聖書から子どもたちを「神からの祝福のしるしとして受けとめ、その子どもたちが、神の招きに応えて生きる者となることを」願いとし、「イスラエルにおける教育は、その子どもたちが神の招きに応える存在となるために、親および共同体が行なう責任であり、配慮であると理解されている。」としている。また、新約聖書から、「神によって造られた人間が、その神への背信、またさまざまの問題状況にかかわらず、イエス・キリストによって示される神の愛のもとに置かれていることを語」り、「人間は、その罪にかかわらずイエス・キリストの十字架によって赦される存在である。神は人を赦し、創造に示されている神の期待に応えて、人がそれにふさわしく現実のなかで生きることを求めておられる。また、イエス・キリストの復活は人間の希望の根拠を示し、私たちが歴史のなかで創造者である神の働きあずかる勇気を与える。」とし、人間はイエス・キリストを信じることによって現在を生き、将来への展望を与えられるとしている。

以上のように、「指針」における聖書の人間理解は、まず人間が神の創造によって造られた者であること。その人間の現実のありのままの姿（罪の現実のなかで救いを求めて生きようとする）を旧約聖書からみていること。その中でも子どもは、神の祝福のしるしとして与えられており、親や共同体としての責任に委ねられていること。更に神の愛の証明

としてのイエス・キリストの十字架と復活。また、そのことを信じる信仰によって生きる者とされることであるというものである。

このような理解のもと、「キリスト教保育」を次のようにまとめている。

子どもが、神によって創造された存在とし、
神の恵みのもとに育てられ、
イエス・キリストを通して示される神の愛に気づかされ、
今のときを喜びをもって生きる者とされるために、
保育に携わる者がイエス・キリストとの関わりに支えられて、
共に行なう意図的、継続的、反省的な努力であり、配慮である。
そのことを通して、
子どもは、生涯にわたる生き方の基礎を築き、
神と人とに責任ある生き方へと導かれ、
共に生きる社会と世界をつくる者とされる。

Ⅲ 教育目的について

コメニウスにおいては、その目的とは、「人間がすべての完全性と栄光と幸福との頂点である神と結び合い、神の力によって欠けることのない栄光と幸福とを永遠に手に入れること」（2章－1）であり、この究極の目的は、現世の外にあるとするものである。そして、段階を経なければそこには到達できないし、死でさえ究極の線を引くものではないという。それは、キリストの降誕と生涯に示されるように、この世の生涯を終え永遠の住みかへと移されることである。だから、私たちの生命は、まず母の胎内、地上、そして天（2章－10）というように移されることがキリストを模像とする生き方であるというのである。故に、「現世の生命は、永遠の生命への準備にほかならない」（3章－1）と述べるのである。しかし、だからといってコメニウスは、現世を否定しているのでない。コメニウスにとって、現世は来世への過渡期的時期であるから、現世の人間に対して来世への準備の為に課せられた任務があると説くのである。従って、前述したように現世における人間の目的は、①理性をそなえた被造者②被造物の支配者である被造者③自分の創造主の似姿であり、よろこびである被造者となることであり、別の言葉でそれぞれを「学識」、「徳性」（尊敬に値する徳行）、「神に帰依する心」（敬神）（4章－6）と現わしたのである。

更に、コメニウスは、もともとこの三つは種子は、自然的に私たちの中にある（5章）とし、自然とは、人間の最初の基本的な性質、すなわち、最初の人間達が犯した過ちが我

らを追いやる以前の状態へと戻ろうとする、そのようなものが備わっていることという。なぜなら、神の知恵は、何一ついたづらに造ったのではなく、一つ一つの被造物の中に定めておいた目的を実現していくことであり、また、その手段も与えておられるという。だから、「存在するものは皆何かの為に存在するのですし、その目的を完全にはたすことができるように必要な器官と道具を、いや、むしろそれへの衝動を与えられている」（5章－2）と述べるのである。彼が衝動といったのは、何一ついやいやながら、自分の目的に向かうものとか、目的に逆らうようのものはなく、むしろ、自然そのものの原動力によって楽に楽しく自分の目的に向かって進み、もし、これを抑えれば苦痛が生じ死が生じるのだとさえ言うのである。

しかし、コメニウスは言う。学識や徳性、神に帰依する心の種子は自然が与えてくれてはいるが、そのもの自身までも与えているのではなく、それは、「祈りにより、学習ににより、行いによって獲得されるものなのです。」（6章－1）と。

それ故、「教育されなくては、人間は人間になることができない」（前掲に同じ）と教育の必要性を強調する。そして、教育を受けなければ人間も野獣となる例もあるとし、野性児の例を出し説得する。

以上のように、コメニウスは、教育による真の人間形成を目指し、この地上に平和な楽園を建設しようとし、「大教授学」においてその教授法を提示したのである。しかし、人間がそのような世界を建設することが可能なのであろうか。これに対して、コメニウスは神は、人間のために人間の利用の対象として他の被造物を造ったのであるから、その自然を利用することは、神のよしとされることであるという。そして、その利用の仕方は、上述したように、どこで、いつ、どのように、どこまで利用すればよいかわきまえていることが条件なのである。このようにコメニウスの根本思想を概観してくると、人間の有り様はおそらく今日も本質的に同じであり、否むしろ、コメニウスが目指した平和な人間や世界の形成は程遠く、世界のあちこちでの内戦や愚かしい出来事は後を断たない状態であることを思うと「被造物のうち最高の最も完璧な最も卓越した」人間観は、そぐわないと言わざるを得ない。この点は、人間の築いてきたさまざまな文明がよいものばかりではなく、地球環境の悪化をもたらすという大きな問題を生み出している状態を見ても明白である。「指針」においても、子どもをとり囲む状況の変化として、「世界がますます相互依存的となり、地球全体がひとつの運命共同体となり、人類の将来のために人間が共に生き、環境への責任を自覚することが求められるようになってきていること。」として捉えている。このような時代の大きな変化は、見逃すことの出来ない点である。

それでは、キリスト教保育指針における教育の目的とは、また、コメニウスの理論との関わりにおいてどのように考えるとよいのだろうか。指針における「キリスト教保育とは」

の文面に基づき次のように考えてみることが出来る。

一、子どもが、神によって創造された存在として、神の恵みのもとに育てられ、

このことは、子どもが単に両親によって造られたとする浅薄な思想ではなく、人間を越えた存在を意識するおとなによって、絶えず目に見えない超越した存在を感じることができ、またそのことが恵みであるとおとなも子どもも共に感じられることが大切である。コメニウスにおいては、「人間は、被造物のうち最高の最も完璧な最も卓越したもの」であるが、神によって造られたという認識を真に育もうとするならば、それは高度な精神性によらなければ持ち得ないものではないかと感じるのである。

二、イエス・キリストを通して示される神の愛に気づかされ、今のときを喜びをもって生きる者とされるために、

子どもがイエス・キリストの存在を知るためには、当然それを知らせるおとなの存在が重要になってくるのであるが、そのおとながどのようにイエス・キリストをとらえ子どもに伝えようとするかは最も重要な問題であろう。身近なおとなのイエス観によって子どもは、イエス・キリストを通して示される神の愛に気づかされるか気づかされないかということに繋がっていくからである。

さて、イエス・キリストを通して示された神の愛を知るというは、イエス・キリストの生涯の意味を知るということである。イエス・キリストを二千年前の偉人として捉えることは簡単であるが、神の子としてこの世に生まれ、今、生きている者の関係で捉えていくことは、おとなであっても子どもであってもそう簡単ではないし、信仰のあるなしにかかわらず難しい課題である。「指針」のキリスト教保育の目標(1)は、次の通りである。「子どもが、イエスを身近な存在として知ることを通して、見えない神の恵みと導と導きへの信頼感を与えられ、自分自身を感謝と喜びとをもって受けとめ、イエスと共に生きようとする思いを与えられる。」

子どもが自分自身を本当に受容できるということは、まず、周りのおとなによる受容された環境が与えられていなければならない。更に、「今の時を喜びをもって生きるものとされる」ということは、「人が本当に信頼し得るものをもっているかどうかにかかっている。」のであり、「基本的に自分自身が受け入れられている信頼の感覚をどこから得ているかが問われることになる。」のである。更に、「指針」において、子ども観にも通じるのであるが、子どもが自分自身を喜びをもって受け入れるということは、自分の身体的な条件をも含めて自分を受け入れることでもあり年長児ともなると

身体的な能力差が次第に明らかになり、子どもによっては、劣等感などの芽生えも見られるようになるとしている。それ故、子どもといえども、さまざまの矛盾や葛藤のなかに生きていることを理解しなければとする。このような捉え方は、価値観の著しい変化の現在を生きる子どもやおとなには、特に重要な問題である。

三、保育に携わる者が、・キリストとの関わりに支えられて、共に行なう意図的、継続的、反省的な努力であり、配慮である。

上記の目的のために、保育者が行なうべき行為として記されているこの文面の意味は大変深い。これは、おとなも子どもも、男も女も神の前で真に平等とするキリスト教理解に基づき、子どもを社会を形成する重要な一員（パートナー）として位置付けるものである。そのことから、「指針」において次のように記されている。すなわち、子どもの視点から、今日の社会を見直し、現代社会の在り方を問うとともに、他者と共に生きることのできる社会、世界の形成に、子どもと保育に携わる者が参加すること、また、保育を完成されたものと考えるのではなく、常に私たちの行なう保育とは何かを問い、保育することの意味と保育の在り方を問うていくこととしている。このことは、社会を形成する一員としておとなと子どもが歩みを共にし、高い目標をかかげ、その目標に向かってパートナーとして歩むことのすばらしさとともに保育に携わる者としては、常に原点にたち帰り、その原点について思考することの重要性をいう。

以上のようなキリスト教保育の理解から、キリスト教保育の目標として、子どものなかに次のような生き方が培われることを願い、説明がなされている。

①子どもが、イエスを身近な存在として知ることを通して、見えない神の恵みと導きへの信頼感を与えられ、自分自身を感謝と喜びをもって受けとめ、イエスと共に生きようとする思いを与えられる。
②子どもが、自分の力で考え、心を動かし、探求し、判断し、想像力や創造性をもつことができるようになる。
③子どもが、自分と友だちや他の人びととの違いを認めるとともに、その人びとへの信頼をもって共に生活するための努力ができるようになる。
④子どもが、人間の交わりを壊すさまざまの悪に気づき、それに対して抵抗し、平和をつくる努力ができるようになる。
⑤子どもが、私たちの生きる自然や世界を神の恵みとして受けとめ、自然や世界の事柄

に関心をもち、自分たちのできることを考え、行なうようになる。

Ⅳ おわりに

以上、コメニウスにおけるキリスト教の背景と人間観や教育目的を概観し、現代の「キリスト教保育指針」との関連について考察してきたのであるが、約三百年前に近代的教育の先駆けとしてその理念と具体的内容を提示した偉大なる教育者から学びとることは、あまりにも多く研究不足を感じている。入り口にたったばかりではあるが、コメニウスの時代への鋭い洞察力とそこから生まれる真実を追求するパワーは、時代をこえ迫ってくる。堀内守は、コメニウスの教育のまなざしについて四つあげている。第一は、＜見破る力＞とし、退廃した教育への切り口の鋭さを指摘している。第二に、＜ことばのリアリティ＞について、生きものとしてのことばへの見直しである。第三に、＜目に見えぬものを目に見えるようにする教育＞である。第四は、コメニウスの視野である。単に、その広さを問題にするのでなく、むしろ疑いと不安と困惑と恐怖を通り抜けたことの重要性を述べている。

さて、今日の日本における状況も目に見える形の戦争ではなく、目に見えない、形を別にした戦争が人びとの心を荒廃させている。そして、キリスト教保育においては、そのような状況に置かれている子どもたちのへのまなざしを見つめ直していくことが求められている。私たちは、時代をこえ迫ってくる先人の声に耳を傾けながら、キリスト教保育の使命とは何かを常に問い続け行かなければならない。今回、コメニウスの具体的教育内容にまで踏み込むことができなかったことを今後に課題として残しているが、次の「指針」の前文をまとめとしたい。「また、世界的な広がりから教育、保育を考えるならば、子どもを育てようとする意志が、単に自国を中心とする国の利益や経済発展を中心とする発想から生じるのではなく、世界に通じる理想に支えられ、平和を作り出す希望に支えられているかが問われなければならない。特に、国際性が強く求められている現代にあって、子どもたちの成育を助ける努力は、国家主義、経済至上主義に捕われることなく、世界の人びとがその違いを認めつつ共に生き、人間の生きる世界を守る地球的な視野に立ってなされることが必要であろう。ことに世界に通じる普遍的なものが何であるか、保育に携わる者の歴史意識とも関係して、問われなければならない課題である。」

〈引用・参考文献〉

(1) コメニュウス著　鈴木秀勇訳 「大教授学」Ⅰ・Ⅱ　明治図書　1979年版
(2) キリスト教保育連盟 「キリスト教保育指針」1989年
(3) 堀内守著 「コメニウスとその時代」 玉川大学出版部　1984年
(4) 松島鈞・白石晃一編集 「現代に生きる教育思想」 ぎょうせい
(5) 荘司雅子編 「幼児教育の源流」 明治図書　1976年
(6) 秋葉美也子 「コメニウスの幼児教育論」日本ペスタロッチー・フレーベル学会紀要 「人間の教育」1986年